

斉梁類書における魏晉知識の典故化

付 晨晨（桜美林大学非常勤講師）

本発表は南朝類書『華林遍略』を藍本とした『藝文類聚』に分析を加えることで、斉梁類書がもつ歴史的意義を明らかにする。

『藝文類聚』に代表される類書は貴族の文学趣味を満たす工具書として見られることが多い。しかし、類書の祖とされる『皇覧』が漢魏革命の頃に編纂されたことから、同書は漢に代わった曹魏文帝が新たに知識を秩序づけたものと考えられる。『皇覧』以後、同種の書籍が編纂されるようになったのは三〇〇年後の斉梁時代である。従って、斉梁類書は新しい知識の秩序を打ち立てたと考えられる。

斉梁類書の延長線にある『藝文類聚』が引用する魏晉以降に編纂された書籍の内容には二つの特徴がある。一つは地理空間の拡大である。引用頻度の高い『会稽典録』『荊州記』『風土記』などが中国南方の記載を充実させている。もう一つは精神世界の拡大である。『藝文類聚』における引用率の上位を占める書籍に、後世では志人小説とされる『世説新語』や『語林』、また志怪小説とされる『搜神記』や『幽明録』があり、類書が貴族の振る舞いから地方の伝説までを収録していることがわかる。この二つの特徴を類書に提供した書籍、及びその書籍にまとめられた内容は、必ずしも貴族階級の人物がその社交場において形成したものではなく、二流以下の士族や庶民階層の「語り場」で形成された。こうした内容の書籍が経書や史書と平等に収録されたところに、斉梁類書の歴史的意義がある。

斉梁類書は皇帝や諸王の発意の下に、学問によって彼らの近くに侍従した寒門学士によって編纂された。彼らによって魏晉以降に貴族から庶民までの「語り場」で形成された書籍が漢代やそれ以前の歴史と結びつけられ、一書にまとめられることで類書は知識の全体図を示すものとなった。これによって魏晉知識が典故化し、漢代までの知識図を多様化・拡大させたのである。